

2022-2024

**Sustainability
Report**

Our Sustainable Action

私たちの実践 . . . p 03

Lessons Learned

私たちの学び . . . p 15

Conclusion

おわりに . . . p 22

小さな会社の、丁寧な挑戦

私たちは、まちづくりのコンサルティングを担う15人規模の小さな会社です。日々の業務では、地域独自の魅力や価値を引き出すことを大切にしながら、環境に配慮した企画提案の機会を少しずつ増やしています。

社内においても、環境に対する意識を高め、できる取組から積み上げていくことにチャレンジしています。もちろん、私たちのような小さな会社の取組が地球温暖化の緩和に与える直接的なインパクトは限られています。しかし「ローカル」を大切にしている私たちは、身近なことに丁寧に向き合うことの重ね合わせが、グローバルな大きなインパクトへとつながっていると信じています。

また、小さな会社でも取り組める仕組みや活動を模索し、その実践を積極的に発信していこうと考えています。そして、私たちの挑戦が、同じような規模の企業のヒントやモデルとなり、小規模事業者の中で環境への活動が広がっていくことを願っています。

Our Sustainable Action



01
現状を知る



02
エネルギーの
使用料の削減



03
購入するもの
を選ぶ



04
本業を通じた、
環境への挑戦

01

現状を知る

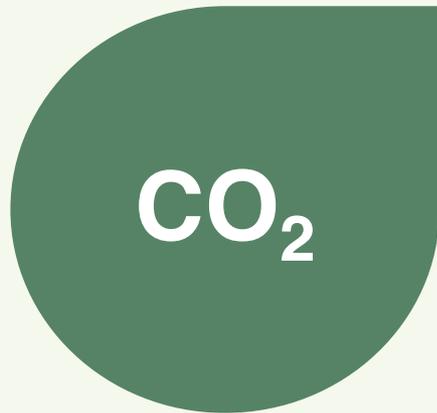
消費量の把握

温室効果ガスの排出量や資源の消費を削減するため、まずはどれくらい排出・消費しているかを算出することから取り組み始めました。

01 現状を知る

エネルギー

事務所の電力や都市ガスの使用量から、直接的に排出しているCO₂を計算しています。



3カ年で排出したCO₂

14.51 トンCO₂

column

カーボンオフセットを実施

算出した排出量をもとに、事務所での事業活動で発生したCO₂排出量のカーボン・オフセットを実施しました。

購入したオフセット・クレジット

以下のプロジェクトが吸収・排出削減したCO₂のクレジットを購入しました。

- ・北海道4町連携による間伐促進型森林づくり事業
- ・滝上町ホテル溪谷木質バイオマス活用プロジェクト





カーボン・オフセット証明書

CERTIFICATE OF CARBON OFFSET

株式会社石塚計画デザイン事務所 様

この証明書は、下記におけるオフセット・クレジット（J-VER）を環境省の無効化口座へ移転することにより、カーボン・オフセットが完了したことを証明します。

オフセット内容：株式会社石塚計画デザイン事務所の2022年度（22.4～22.9）及び2023年度（22.10～23.9）の決算期の事業活動で排出したCO₂の一部をオフセットする。

排出権の種類：滝上町ホテル溪谷木質バイオマス活用プロジェクト
排出権識別番号：JVR JP-200-000-000-242-865～
JVR JP-200-000-000-242-871

無効化口座への移転日：2024年1月9日

オフセット量
7 t-CO₂

2024年1月9日
北海道森林バイオマス吸収量活用推進協議会
会長 下川町長 田村 泰司
事務推進課長：北海道下川町総務企画課
住所：〒096-1205 北海道下川町下川町南町 63 番地

無効化
北海道
吸収量
活用推進
協議会
認定
森林



▶カーボンオフセット先をどのように選んだかについては、16pをチェック！

01

現状を知る

コピー用紙（重量）

複合機で使用したコピー用紙の重量を計算しています。



* A3・A4のコピーカウントをもとに、コピー紙の平均的な重さから総量（概算）を算出しています。

デジタル化が進み、ワークショップなどの会議での配布資料などは感覚的に減った印象でしたが、数値としては微増しました。

01

現状を知る

社内研修の実施

まずは気候変動の基礎知識の向上に向けて、弊社のパートナーでありLGBTs × 環境保護活動を実施している**LGBT-JAPAN代表：田附亮さん**による研修を受講しました。ダイビングもされている経験から、海の変化をもとに気候変動や気候危機に関する基礎的な情報をお話しいただきました。

「海の中から考える気候変動 ～超基礎編～」

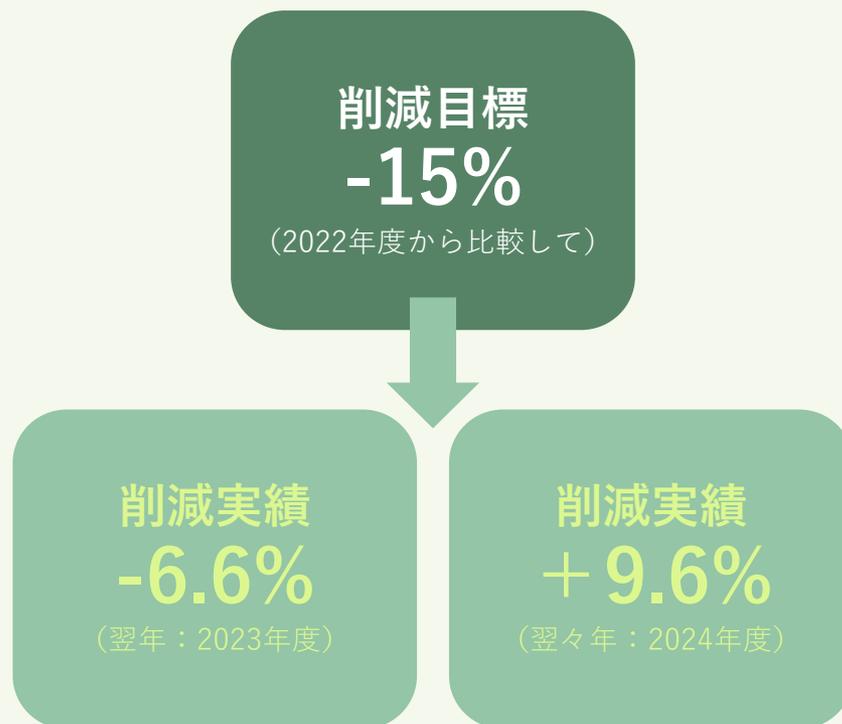
2024年 6月 12日 (水) 16:30～18:00



02

エネルギーの 使用料の削減

電気や都市ガスの使用料から排出量を計算し、それをもとに削減目標を設定しました。



2020年のパンデミックでリモートワークを積極的に取り入れたことで事務所の利用が減りましたが、2023年5月に新型コロナの5類感染症への移行に伴い、事務所利用の頻度が増加したことで排出量も増加したと考えられます。

03

購入するもの を選ぶ

<セルローススポンジの採用>

給湯室では天然繊維から作られた「セルローススポンジ」を採用しています。一般的なスポンジは、使うたびに目に見えない細かなプラスチック片（マイクロプラスチック）が排水と一緒に海へ流れてしまうことがあります。植物由来のセルロースならその心配がなく、最後は土に還る、地球にやさしい選択です。

<環境にやさしい洗剤>

毎日使う洗剤も、成分にこだわって選んでいます。私たちが選んでいるのは、高い生分解性（微生物によって分解される性質）を持つ植物由来の洗剤です。汚れを落としながらも、排水先の川や海の生態系に負担をかけないものを選択しています。

<リターナブル瓶>

事務所の飲み物では、リターナブル瓶の商品を選択しています。使い捨てのペットボトルや缶とは異なり、洗浄して何度も繰り返し使える瓶は、資源の消費を大幅に抑えることができます。



04 本業を通じた、 環境への挑戦

私たちは、まちづくりの専門家として、日々の業務そのものが持続可能な社会を築くための大切な活動の場であると考えています。「小さな会社の、丁寧な挑戦」という理念に基づき、一つひとつのプロジェクトにおいて、地域に暮らす人々と共に環境への配慮を具体化する機会を追求しています。

04

本業を通じた、 環境への挑戦

市民との対話から、社会の仕組みを変える



気候変動という地球規模の課題に対し、個人の努力だけに頼るのではなく、社会全体の仕組みを変革することが不可欠です。杉並区や多摩市で支援した「気候市民会議」は、その大きなうねりを地域から生み出すための挑戦です。無作為抽出で選ばれた市民の方々が熟議を重ねて練り上げた行政への提言は、多様なステークホルダーを巻き込み、社会の「常識」そのものを変えていくきっかけとなります。私たちは、その第一歩が、市民一人ひとりの対話から始まると考え、そのプロセスを丁寧に支えています。

04

本業を通じた、 環境への挑戦

地域固有の環境を守り育てる、生物多様性への貢献



三鷹市「北野の里」での取組では、武蔵野の面影を残す地域固有の環境に着目しました。この環境は、かつての薪炭林など、地域の生業である農と共に育まれてきたものです。その役割は時代と共に変わりましたが、私たちは環境教育プログラムや農体験などを通じ、この貴重な自然を現代の暮らしの中に再び根付せることを目指しています。落ち葉や落枝、剪定枝等を資源として活用する「バイオネスト」づくりなどは、自然の循環を学び、豊かな生態系を次世代へと繋ぐための具体的な活動です。

本業を通じた、 環境への挑戦



課題先進地から描く、 持続可能な都市のあり方

少子高齢化などが進む「日本の課題先進地」である北海道で取り組んだ「北の住まいるタウン」の検討では、寒冷地の特性を踏まえた持続可能な都市のあり方に向き合いました。コンパクトなまちづくりを基盤としながら、再生可能エネルギーの導入や資源循環の仕組みを組み込むことで、環境負荷が少なく、誰もが安心して心豊かに住み続けられる地域づくりを模索しています。

私たちは、これからも地域に深く根差し、丁寧な対話を重ねながら、まちづくりのさまざまな場で環境への議論を深めていきます。

Lessons Learned

01

現状を知る

活用した支援／課題

日本商工会議所：CO₂チェックシート

まずは自社の活動によるCO₂の排出量の現状を知ることから始めました。中小企業向けにオープンソースとして公開されている日本商工会議所の「CO₂チェックシート」を活用しました。無料でダウンロードできるエクセルのシートで、毎月の光熱費からCO₂排出量を算出できます。

より多くの項目から排出量を測れる有料の算出サービスもあり活用を検討しましたが、まずは無料のチェックシートからスタートすることにしました。一方で、算出できる項目に限りがあ*ることが課題です。実情をより正確に把握するためには、他の計算ツールが必要です。

* 事務所での消費量などの直接的な排出量のみ計算しており、例えば出張を通じた航空機や車での移動などは算出できていません。一般的に、間接的な排出量（Scope3）は算出が難しいとされています。

ツール：<https://eco.jcci.or.jp/checksheet>



01

現状を知る



北海道の森林とともに歩む
持続可能な未来へ

4REST
について



こだわったこと

北海道のカーボン・オフセットを選びました

カーボンオフセットとは、削減が難しいCO₂について、他の場所で行われたCO₂吸収や排出削減のためのプロジェクトで埋め合わせる仕組みです。日本では、「J-クレジット」や「オフセット・クレジット（J-VER）」などの国が認定する国内のクレジットを提供する制度があり、多くのプロジェクトが登録されています。

クレジットの購入先を検討するにあたり、このような制度に認定されていることを基本に選定しました。また、多くのプロジェクトの中から選ぶ際には、祖業の地である北海道に還元すること、さらに弊社の業務などで関わりのある自治体の取組に貢献することにこだわり、北海道の4町が連携して取り組んでいる「北海道森林バイオマス吸収量活用推進協議会」のクレジットを購入することに決めました。

参考：

環境省「J-クレジット制度及びカーボン・オフセットについて」

https://www.env.go.jp/earth/ondanka/mechanism/carbon_offset.html

北海道森林バイオマス吸収量活用推進協議会

<https://www.hokkaido-tree.jp/>

02

エネルギーの 使用料の削減

活用した支援

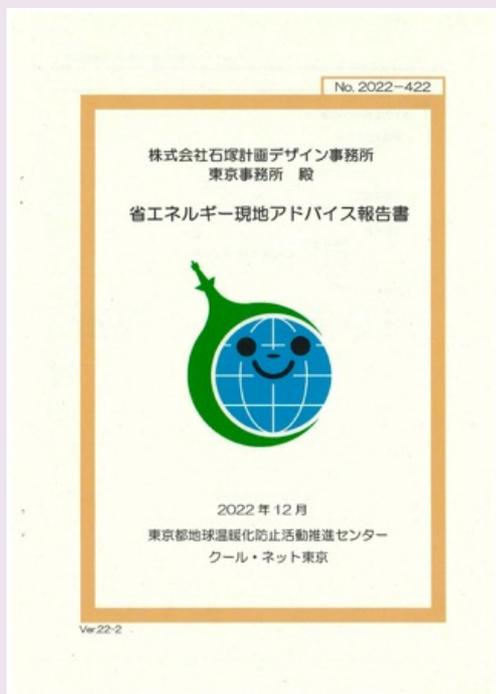
東京都地球温暖化防止活動推進センター クール・ネット東京：省エネ診断

専門家による現地視察を踏まえ、事務所としてどのような対策を取れるか、診断やアドバイスを受けました。実際の事務所内の環境をみていただき、具体的に実施できる取組についてカスタマイズされたアドバイスを受けました。

削減に向けて実施したこと：

- ・空調の適度な温度設定（1℃ごとに10%のエネルギーの削減が可能）
- ・サーキュレーターを導入による空調の効率化

一方で、省エネでの削減量の限界も見えてきました。診断を通じて、省エネ施策を頑張ったとしても、削減量は-10%だということがわかりました。



02

エネルギーの 使用料の削減

苦勞したこと・悩んだこと

再生エネルギーに切り替えられない

家庭の電力の切り替えは簡単にできるものの、弊社が所在するオフィスビルはオーナーによって一括管理されているため、テナントごとに電力会社の選択ができないことがわかりました。オーナーとしても電力を再エネに切り替えるメリットがなく、「再エネは高い」というイメージがあることから、切り替えの実現はできませんでした。1テナントとしてできることには限りがあり、自治体施策によるオフィスビル／複合ビルの再エネへの切り替えの推進の必要性を実感しました。



03

購入するもの を選ぶ

こだわったこと

毎日使うものへ、まずは身近な投資を試してみる

環境に良いとされる製品は世の中にたくさんありますが、効率や利便性を優先すれば、安価で使い勝手の良いものを選択する方が簡単です。しかし、環境にやさしいものを選ぶことはあえてそこに「ひと手間」や「不便さ」を発生させることで自分たちの意識を変えることに繋がっていると思います。環境配慮と聞くと何か大きな変革が必要に感じますが、毎日使うものから変えてみるという、最初の小さな一歩として、購入するものを選ぶことは良いアクションだと信じています。



04

本業での学び

業務を通じて環境課題に向き合う中で、私たちは多くの学びを得ました。

気候変動問題に向き合う議論の場では、私たちの専門性だけでは不十分であり、環境分野の専門家の知見を掛け合わせることの重要性を認識しました。その上で、専門的な情報をわかりやすく伝え、多様な立場の人々の対話を促して社会のコンセンサスへとつなげるプロセスにこそ、ファシリテーションが持つ役割と価値があることを実感しました。

また、将来世代との対話は、気候問題に内在する世代間の不公平という視点を私たちに強く意識させました。子どもたちを活動のアイコンとして安易に扱うことは許されず、彼ら・彼女らの未来に実質的な成果を残すことへの責任を感じました。

そして、生物多様性というテーマは、その土地固有の自然環境と深く結びついていることを教えてくれました。画一的な視点ではなく、その場所の歴史や人々の営みの中に育まれてきた自然に丁寧に向き合うこと、その価値を地域の中で再発見していくことの重要性を学びました。

Conclusion

今後、取り組みたいこと

消費量や排出量のより正確な把握

飛行機や車移動による排出量など、現在実施できていない「間接的な排出量（Scope 3）」の把握や、ごみなどの算出方法のアップデートにチャレンジします。

削減アプローチの再構築

省エネの限界や設備の制約を踏まえ、現実的な消費料の削減目標の再設定をします。今後は、事業活動を維持しながら実現できる、実行可能な削減量に見直して取り組んでいきます。

CO₂吸収源への直接的な貢献

これまではカーボン・オフセット（クレジット購入）による間接的な貢献を実施してきましたが、今後は自分たちでも手や体を動かし、植林活動といったCO₂の吸収を増やす活動に貢献していきたいと思えます。

多様なステークホルダーを巻き込んだ仕組みづくり

これからも、まちづくりの専門家としてのファシリテーション力を活かし、多様な立場の人の対話を応援し、社会の仕組みをアップデートしていく取組につなげていきます。

おわりに

これまでの経験で得た学びを糧に、私たちはこれからもまちづくりの専門家として、環境課題への挑戦を続けていきます。

容易に答えが見つからない問いに対しても、丁寧な対話を起点としながら、多様なステークホルダーを巻き込み、社会に変革を起こす仕組みづくりへとつなげていきたいです。

そして、それぞれの地域にふさわしい実践の積み重ねが、グローバルなインパクトへとつながることを意識し、持続可能な未来を目指します。